

---

**アーマード・コア** Another story

ナインボール

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アーマード・コア Another story

### 【Nコード】

N8919X

### 【作者名】

ナインボール

### 【あらすじ】

旧管理者が眠る地下世界レイヤード。

その地下深くで次元の歪みが発生した。次元の歪みから、他の世界のレイヴン、リンクスが飛ばされてきた。

元の世界から飛ばされたレイヴン、リンクス達は『オリジナル』と呼ばれた。

また、飛ばされたレイヴン、リンクス達とは別に、次元の歪みから発生した、飛ばされた者が搭乗する機体だけで、中身は空っぽの破壊を繰り返す『レプリカ』達。

これは、飛ばされた人達を元の世界に戻すために戦ったあるレイヴ  
ンの物語

## プロローグ

地下世界レイヤードを支配していた管理者が破壊されて数年後。レイヴン達は未踏査地区：サイレントラインの調査や企業間の戦闘に駆り出されていた。

だがこの時、もうレイヤードの奥底で、ある異変が起きていた。それは、巨大な次元の歪みが発生し、別世界に通じた次元の歪みがある。事が別世界のレイヴンたちとACをこの世界に移動させてしまった。

別世界から移動してきたレイヴン達は見知らぬ世界、見知らぬレイヴン、見知らぬACを見て混乱した。

また、移動してきたレイヴン達の中にはかつて最強と呼ばれたACも居た…

これは別世界から移動してきたAC達やレイヴン達と戦った、あるレイヴンの物語

第1話 新米レイヴン（前書き）

ほぼ作者の駄文自己満足の話です

## 第1話 新米レイヴン

俺の名前はナインス・アーカード、  
数年前、地下世界レイヤードから地上に出て、二ヶ月前にグローバルコーテックスに登録したまだ新米のレイヴンだ。

まだ俺のAC、レッドフォックスはグローバルコーテックスから支給された状態から変わらない、いわゆる初期装備というやつだ。

俺は早くこの装備をかえて、AC同士で戦ってみたい。だがそれは無理だ、なぜなら金と経験が無い、それだけの理由だ

そう考えながら俺は依頼されているミッションの一覧を見た。ついでに今の貯金は2000cだ

ミッション一覧を見ると、あるミッションに目が止まった

「えつと…テロ集団排除？」

契約金1000c…報酬額…8000c!？」

報酬額の高さに思わず叫んでしまった。

だが報酬が高いということはそれ相応のリスクがあるということになる、俺はこのミッションの詳細を見る事にした

「うーんと…レイヤード封鎖地区にテロリスト達が集まって何かしようとしている。敵勢力は逆足MT3機、重装型MT2機。

敵勢力は少ないが、何かおかしい、レイヴン、テロリストを撤退させるだけでいい、無駄には殺すな…か、まあ、楽勝だろ！こんな簡単なミッション！」

俺は素早くこのミッションに契約し、俺のACがある格納庫へ向かった

第2話 ミッション開始(前書き)

長かった…

## 第2話 ミッション開始

- 目標地点確認…
- 修正プログラム…チェック完了
- システム…通常モードから戦闘モードに移行…
- ミッションを開始します…

「よおーし！やってやるぜ！」

俺のAC、レッドフォックスは今テロリスト達を排除するため、レイヤードの封鎖地区入り口まで来た。

まだコックピット内のモニターには敵影は無く、ただ封鎖地区の奥に向かってレッドフォックスを操縦しているだけだ

「それにしても敵が居なさすぎるなあ…」

と俺が言った時、オペレーターのセラス・アーノルドが答える様にこう言った

「レイヴン、あんまり調子に乗らないでね。油断すると死ぬわよ」

それに対して俺は

「はいはい、マジメにやりますよ」

「マジメにねえ…今まで何回聞いたかしら…」

セラスがそう言ったとき、コックピットのモニターの奥に動く何か  
が居た

「オペレーター、敵機を発見した、解析を頼む」

俺がそう言ったすぐ後に

「わかったわ…逆足型MTの熱源を2機確認…目標の破壊を実行  
してください」

「了解！」

そしてテロリストのMTまで300m程まで近づくと、敵MTがレッドフォックスに向かって小型ミサイルを2発撃ってきたが、コアのミサイル迎撃機能により、どちらも破壊した

そして1機のMTとの距離を一気に縮め、レッドフォックスの左腕武装のCLB-LS-1551（初期装備のエネルギーブレード）を起動し、ブレードを展開させて敵MTを真つ2つに斬った

斬られたMTは一瞬間をおいて爆発し、ただのスクラップになったその後もう1機のMTに右腕装備CWG-RF-200（初期装備の実弾ライフル）を向けてロックオンし、3発発射した。

弾は3発中2発命中し、敵MTは黒煙を上げたあとにエンジンから発火し、爆発した。

「オペレーター！他の敵機は！？」

「えっと…1時の方向、500m先に逆足MT1機と重装型MT2機確認！」

「了解！」

俺はレッドフォックスのブースターを機動させ、高速で敵機の方へ向かった。

ブースターを使い高速で進むと、オペレーターの解析どおり、逆足MT1機と重装型MT2機がレッドフォックスを待ち構えていた。

重装型MT2機がレッドフォックスに向かってバズーカ砲をそれぞれ2発ずつ撃ってきた

バズーカの弾速は速く、全弾避けようとしたが、2発レッドフォックスのコアと右足に当たってしまい、少し機体のバランスが崩れよろけてしまった。

「破損状況は…クソッ、コアミサイル迎撃機能がダウンしてやがる。よくもやってくれたな！」

俺はレッドフォックスを加速させ、重装型MT1機とすれ違う時にMTの胴体関節部分に右手武装のライフルの銃口を押し付け、ゼロ距離で弾を5発撃った。そのMTは内部から爆発し、辺りに壊れたパーツが飛び散った。

俺はさっきの1機を破壊したあと、機体を加速させたままエネルギーブレードを起動し、もう1機のMTの胸の辺りにブレードを突き刺し、破壊した。

そして残った逆足MTにライフルを向け、照準を定め、4発撃ち込んだ

「全ターゲットの破壊を確認。

レイヴン、ミッション終了よ。帰還するからミッションの開始地点まで戻って」

オペレーターの声がコックピット内に響いた

「よし！何かおかしいとか詳細に書かれてたけど結局何も無かったし、早く開始地点に戻るかな！」

俺は機体の向きを来た方向に変えた

その時だった。

コックピット内のモニターが光に包まれ、その直後にすさまじい衝撃がAC全体を駆け巡り、レッドフォックスはバランスを失い、地面に倒れた

## 第2話 ミッション開始(後書き)

次回は別作品のAC?が登場します!

### 第3話 破壊天使（前書き）

長くて後半グダグダになりました…  
少し修正もしました

### 第3話 破壊天使

- エネルギー供給率：低下
- 危険度：DからAに移行
- 頭部レーダー機能：破損

警告音と赤く点滅している警告ランプとともに、そんなメッセージが所々砂嵐が流れているモニターに映しだされている

「クソ：何が起きた…」

とそのとき、オペレーターから通信が入った

「レイ：ザザ：ヴン：ザー：大丈夫：ザ：夫？」

「オペレーター！もう1機敵がいる！解析をしてくれ！」

俺はノイズの混じったオペレーターの通信に返事をしたが、オペレーターから返事が返ってこなく、モニターを見ると、

- 通信機能故障

とメッセージがあった

「何なんだよ！俺はミッションをしていただけだ！何でこんな目に会わなきゃいけないんだよ！」

やけになってそう言った後に、モニターを見てみると異様なものが映っていた

「天：使？」

モニターには、背中に6つの翼を生やした白い天使が映っていた。だが、それは見間違いだった。

天使の翼が2つ、こちらを向いたかと思うと、翼の先端が光りまたモニターは光に包まれ、衝撃が機体を走った

そしてまた警告音と共に、メッセージが映しだされた

- 右脚部破損

- 残AP20%を切りました

「嘘だろ！？何をやられた!？」

俺は驚きながらも一度モニターの天使を見た

そしてまた驚き、絶望した

それは天使などではなく…ただ破壊をする天使…破壊天使のようなACだった。

天使の翼だと思ったものは、そのACのバックユニットだった。

「何だよ…あの機体…あんなの…見たことねえ…」

そうだ、あの天使のようなACは見たことの無いパーツで構成されていた

「まずは逃げないと…」

俺はレッドフォックスを立ち上がらせようとしたが、さっきのあのACの攻撃で右脚を失っており、うまく立ち上がれずにいた

「クソ…早くしないと…」

その瞬間、俺のACの両腕に何か撃たれ、どちらも破壊され、レッドフォックスはまたバランスを崩して倒れた

「何だよ！何でなんだよ！」

俺はレッドフォックスの片足を使い、あの天使のようなACの方に機体を向かせた

そして相手が一撃で腕を破壊したものを撃っているかがわかった。

あのACの背中のユニットから太いレーザーが発射され、残った左脚を粉々に破壊した。

「あんなの…ありかよ…」

俺は絶望し、もう2度と目の目を拝むことができないと確信し、気を失った。

そして…俺のACは何故かミッションの開始地点にコアと頭部だけという異常な形態で戻っていた所を救助隊に発見された

第3話 破壊天使（後書き）

ついでに白い機体はノブリス・オブリージュです

第4話 ある病院にて・前編（前書き）

珍しく作者が頑張ったようです

#### 第4話 ある病院にて・前編

side:レイヴン

……  
俺は今、真っ白い何も無い部屋に立っている。この部屋には扉も無く、あるはずの俺の影も無い

そしてさっきからこの部屋にはある音が木霊している

『レイヴン…』と

また、何故かさつきから右頬も痛くなり少し腫れてきた

次の瞬間、目の前に黒い巨大な6つの翼の生えた人のような形の影のようなものが現れた

『こいつ…見たことがある…』

そう考えた瞬間、黒い影が俺を翼で包みこんだ

俺は視界がどんどん黒くなるを感じながら、意識を失った

……

side:オペレーター、セラス

「レイヴン…起きてよ…」

私は今、病院のとある患者のベッドのとなりに座っている

その患者は私のパートナーであるレイヴン、ナインス・アーカードだ。

彼は数日前のミッション中に、謎のACに襲われて、何故かミッション開始地点に彼と彼のACがあり、そこを救助隊に発見された。その後彼はそのまま病院に運ばれた。

そして今私はその彼の病室に見舞いに来ている

「レイヴン…起きてよ…貴方が起きてくれないと…私が…私が……」  
私はそこで持つてきていた見舞いの花束の中から紙の束を取り出し、寝ているレイヴンをその紙の束で何回も叩きながらこう言った

「貴方が起きないと私が貴方のACの修理費用を払わなきゃいけないのよー！」

その時ベッドに横たわるレイヴンのまぶたが少し動いた  
side:レイヴン

痛い……

頭が何かで叩かれているみたいだ……

声も聞こえる……しかもさっきより痛みが増してきた……

いやマジ痛いつて、やめてくれよマジ痛いから

……

「痛いと言ってるだろ！」

「レイヴン！起きたのね！」

メキッ……

「ぐふっ……」起きた瞬間、俺の鳩尾に誰かの頭？が当たり腹に激痛  
が走る

そして俺のまだ鳩尾に痛みがある腹には、見慣れない金髪で長髪の  
小学生より少し身長が高いぐらいの少女が俺に抱きついていて

……誰かの病室を間違えたか？

「えっと……君……家の人は？」

俺の質問にその子はムスツとして答えた

「レイヴン、子供扱いはやめて。」

「なんで俺がレイヴンだと知っている」

「あれ？直接会ったことは無かったっけ？いつも話してはいるはず  
よ」

その言葉を聞いた時、俺の脳内に1人の人物が浮かび上がった

「まさか……オペレーターか？」

「そう、当たりよレイヴン、気づくのが遅いわ」

……確かにいつもミッション中に聞いている声だな……だけど見た目が  
……

「レイヴン……今私の見た目の事を考えているでしょ……」

「いや、そんな事全然思っていないぞ！オペレーター！」

…何故俺の考えている事がわかる…こうなったら話を逸らさないと  
マズいな…

「そうだ、そういえばなんでオペレーターは此処にきたんだ？」

「ああそうそう、貴方に届けるものがあつたの、それを渡しに来た  
わ。」

「俺に届け物？一体何だ？」

「これよ」

そう言うとオペレーターは名刺サイズの沢山の文字が書かれている  
紙の束を渡してきた

「まずは読んでみて」

「えっと…『請求書：レイヴン、ナインス・アーカードに下記の金  
額を請求する

AC修理代：150000c』

………はああああ！！？何だこれ！？あり得ないだろ！払えるわけ  
無いだろ！」

俺は驚きのあまり叫んでしまった。だがしょうがないとも言える。

150000cもあれば5年は好き放題に暮らせる、そんな大金だ。

まあ現に俺はその金額を求められているわけだが…

そして、またそこにオペレーターが悲しい事実を伝えた

「ついでにその請求書に書かれている金額だけど、貴方の貯金と入  
院前に受けたミッションの成功額は抜いてあるから。」

「いや、無理です」

あまりの酷さに泣きなくなつた…そういや俺のAC頭とコア以外全  
部壊れてたしなあ…

「だけどねレイヴン、安心して、貴方の借金は一時的にグローバル  
コーテックスが負担してくれるわ。

まあミッションの成功金は全額グローバルコーテックスに移行され  
るけどね」

その時オペレーターが救いの手を差し伸べてくれた。

でも待てよ…全額？いやいやいや、そうなるよ…

「俺がミッション受けられないじゃん、あと生活費とかもあるし」

「そこは私が負担するわ」

…まあ、ありがたい…のか？

「それとレイヴン、一つ聞きたいことがあるの」

オペレーターが急に真面目な顔になって聞いてきた

「なんだオペレーター？急に真面目な顔になって」

「レイヴン、ここからはおふざけ無しよ。」

貴方を襲ったACについて聞きたいの」

その瞬間、俺の嫌な記憶が蘇った

第4話 ある病院にて・前編（後書き）

長いし疲れた…

第5話 ある病院にて・中編（前書き）

また作者が頑張ったようです

## 第5話 ある病院にて・中編

「レイヴン、貴方を襲ったACについて聞きたいの」

オペレーターはその言葉を聞いたとき、俺の中で今思い出したくない記憶が蘇った。

圧倒的な力で俺のACを破壊し、そして何故か最後に俺を殺さなかったあのACと戦った時の記憶だ。

セラス（オペレーター、以下セ）「それで、襲われた時のことだけど、一体何をされたの？」

ナインス（レイヴン、以下ナ）「ああ…まずミッション目標を全滅させてミッション開始地点に戻ろうとした。

ここまでは通信が続いていたからオペレーターも知ってるはずだ。」

セ「ええ、ただ問題なのは…」

ナ「ああ、ミッション開始地点に戻る途中だ。話を戻すが、俺はミッション開始地点に戻ろうと来た道を逆行しよう」と向きを変えた。

その時だったんだ、突然相手ACのバックユニットのレーザー砲を右脚部に受けた。

そのまま右脚部は大破して、勿論俺のACもバランスを失って倒れた。

そしてこの時ヘッドにも被弾して通信機能が壊れた」

セ「ええ、確かに壊れる直前までの声は私も聞いてたわ。それで、その後は？」

ナ「通信機能が破壊された後は一度逃げようとしたけど、立ち上がった瞬間にまた両腕部をレーザー砲で打ち抜かれてまたバランス崩して俺のACが倒れた。

で、倒れた時に相手の機体を見たけど、今まで見たことの無いパーツで相手の機体は構成されていた」

セ「見たことの無いパーツ？どんな形だったの？」

ナ「なんか…全体的に白くて、キサラギでもクレストでもミラージユのパーツでもないやつだった。

あと武器も見なかったことが無いやつだったよ。」

セ「どの会社のパーツにも無いパーツねえ…」

まあいいわレイヴン、話を聞かせてくれてありがとう。

私はもう帰るわ」

オペレーターはそう言いながら病室の出口へ向かい、扉を開けた。

俺はオペレーターが病室から出ていく前に礼を言わなければマズイ  
と思い、病室から出ようとしているオペレーターに声をかけた

ナ「今日はわざわざありがとうな、セラス」

セ「ええ、話を聞いてよかったわ。レイヴン」

返事をしたオペレーターの様子は、声はいつも通りだが、何故か顔  
が真っ赤だった

ナ「オペレーター、どうした？顔が赤…」

セ「じゃあレイヴン！また今度ね！明日には退院できるって！」

そして俺の話を遮ってオペレーターが顔を真っ赤にしながらそう言  
い、病室から出ていった。

…俺、何か嫌われる事したか？……

俺はそう思いながら、また寝るためにベッドに潜り込んだ。

side：オペレーター、セラス

やった！ついに名前で呼ばれた！

私はそんなことを考えながら上機嫌で病院の出口へ向かう。

今私が何故こんなに機嫌がいいかというと、さっきまで見舞いに行  
ってたある人に名前で呼ばれたからである。そして勿論私は彼の  
事が好きだ。

…彼のオペレーターになって早一年、ようやく名前で呼ばれた！

ずっとそんな事を考えながら歩いていると、いつの間にか私は病院

の入り口近くまで来ていた。

だけど、そこで私はあり得ない事態に遭遇した。

そこは私が病院に入ってきた時の穏やかさなど微塵もなく、ただ悲鳴と火がパチパチと音をたてて燃える音しか聞こえなかった。

そしてそこには、彼がミッション中に襲われたと言っていたACがいた

**第6話 ある病院にて・中編その2（前書き）**

今回はオペレーター視点の話です。  
後半注意

## 第6話 ある病院にて・中編その2

セラス「うそでしょ…なんで…ここに」

私は何故こんな場所にACがいるのかわからなかった。

しかもここにいるのは私が愛している人を襲ったACだ。

セラス「逃げなきゃ…！」

幸い相手は私に気づいていなかったため、楽ではないが、見つからずに逃げられた。

そして私は今来た病院の廊下を走って、彼の病室まで戻った

セラス「レイヴン！貴方の言っていたACがいたわ！」

ナインス「どこにいたんだ？」

セラス「この病院よ！早く逃げる準備をして！」

ナインス「オペレーター、冗談はやめた方が…」

彼が話している途中、爆発音が私達のいる部屋の近くで響いた。

そして爆発音と共に病室に衝撃が走り、病室が揺れた

セラス「……………レイヴン」

ナインス「今すぐ逃げよう」

彼もようやく敵が来ていると理解して、逃げる準備をした。まあ彼は今まで入院していたから持つていく物はなかった。

私達が部屋の扉を開けた時、そこにはあのACが私たちの目の前にいて、こちらを向いていた。

セラス「嘘…気付かれて無かったのに…」

その瞬間、死への恐怖が私を襲い、私は体をブルブルと震わせたまま動けなくなった。

その時、私の背後に居た彼が、動けなくなっている私を俵担ぎのように担いで、走り出した。

ナインス「オペレーター！何をしているんだ！死んじまうぞ！」

セラス「ごめんなさい…レイヴン。それよりも貴方の身体は大丈夫

なの？」仮にも彼は入院中だ。あまり無茶をすると入院生活を長引かせてしまう。

ナインス「大丈夫だ。火事場の馬鹿力つてやつだな。それにオペレーターも軽いしな」

セラス「レイヴン、ふざけないで…」

私は少しふてくされながら返事をした

その直後、私を担いで逃げているレイヴンが急に止まった。

セラス「レイヴン！どうしたの！？」

ナインス「オペレーター…今降ろすから前を見ってみる…」そう言うと彼は、私をゆっくりと床に降ろしてくれた。

セラス「レイヴン、一体どうしたの？」

ナインス「いいから前を見ってみる…」

彼は少し怒った口調でそう言った

私は彼に言われ、前を見てみた。

私達の目の前には、天井が崩れた瓦礫で出来た、鼠が一匹も通れないほどの隙間がない、瓦礫の壁があった。

そして、少なくとも私は逃げることを諦めた。

だが、彼はまだ諦めていなかった。

彼は必死に手で瓦礫を掴み、瓦礫の壁に穴を開けて逃げようとしていた。

セラス「レイヴン！無理よ諦めて！」

私がそう言うが、彼は作業をやめようとはしなかった。

ナインス「無理だ！意地でも逃げ切らなきゃあのACに二人とも殺されちゃう！」

そう言う彼の手は無数の傷で覆われ、血で赤く染まっていた。

彼の痛々しい手を見た瞬間、私は彼の元へ駆け寄って、彼の手を握ってこう言った。

セラス「レイヴン…もうやめて…逃げることとは出来ないのよ…」

私はいつの間にか泣いていた、おそらく彼が傷つくのが怖いからだろう。

ナインス「オペレーター……すまない……」

そして、彼は私が握っている手をよけた。無防備になった彼の手は私の顔に添えられ、その手で私の顔は彼の方へ向けられた。

私は彼の顔を見た時、心臓が大きく鼓動した。私の顔に添えられた彼の手がとても熱いのがわかる。

そして、段々と彼の顔が私の顔に近づいてきた。

私は彼が何をしようとしているのかがわかった。だけど、わかったからといって嫌がる訳ではない。むしろ嬉しいくらいだ。

そんなことを考えていると、彼の顔がもう近くまで来ていた。私の心臓はさつきよりも早く鼓動している。

そして、私と彼の唇が触れようとした時……

？『君達、お楽しみを邪魔してすまないが話がある』

ACのパイロットスーツを着た男が話しかけてきた。

勿論彼は慌てて顔を離れた。

折角のチャンスが……

第7話 ある病院にて・後編(前書き)

長かった長かったW  
W

## 第7話 ある病院にて・後編

全く警戒をせず、行き止まりになった病院の通路の反対側から、Aのパイロットスーツを着た男が俺とオペレーターに近寄り、話しかけてきた

「安心しろ、君達に危害は加えない。」

男の話し方は、抑揚が全く無く感情が読めない話し方だった。

「アンタは…一体何者だ…」

俺は力の無い声で男に尋ねた。

「自己紹介がまだだったな。私はレオハルトだ、私の機体はノブリス・オブリージユ、君達も見たあの白い機体だ。君とは初めて会うな。」

男はさつきと同じ、機械のように抑揚の全く無い声で話す。

そして俺は男…レオハルトの言った言葉に一つの疑問を抱いた。

「初めて会う?...何を言っている...?」

確かに俺は相手と直接話すのは初めてだ。だが俺は相手と一回会ってはいる。入院前に受けたミッションで襲われた時だ。

「ああ…あの時の事か…：…一つ言うが、あの時の機体は私の機体であって私の機体ではない。第一私はあの場にいなかったからな」

「どういう…事だ?...」

俺が返事をした直後、突然背後の塞がれた通路から銃声と爆発音が響いた。

「来たか…：…レイヴン話は後だ。こちらへ来い、その君もだ。」  
そう言うとレオハルトは俺の手を引き、行き止まりの通路とは反対の、レオハルトがやってきた方の通路へ小走りで向かった。その後ろを「折角の…：…チャンスが…：…」とオペレーターが呟きながらついていった。

レオハルトに手を引かれたまま移動すること数分後、また爆発音が

響いた。しかもすぐ近くで聞こえた。

だが、レオハルトは全く動じずにスタスタと歩いていく。

「おい……」

「……」

「おい……聞けよ！」

「黙れ」

「……クソツ……」

そんな単調で同じ会話を何回も繰り返していると、いつの間にか三人は病院の屋上の扉の前に来ていた。

そして扉をレオハルトが蹴り飛ばすようにして開け、俺に屋上を見ろと言った。

俺は言われた通り屋上の様子を見ると、そこには俺にとってはとても見慣れた物があった。

「おい……何でこれが此処にあるんだ？……」

屋上には、完璧に修理されている俺の機体、レッドフォックスがコックピットのハッチが開いたまま、乗れと言わんばかりに佇んでいた。

そしてもう一つ、俺がミッション中によく相手をした逆足のMTが、俺の機体と同じようにハッチを開けたまま佇んでいた。

「レオハルト……何でこいつが此処にいる……」

「単刀直入に言うが、君を逃がすためだ。」

「逃がす？何からだ？」

俺がそう言った瞬間、一つ下の階（この病院は5階建て。屋上は6階ぐらいの高さで1階の高さは5m程）から複数の豪雨のような銃声が聞こえた。

「警備部隊か？でもテロリスト集団か？その可能性も有り得るよな……」

俺は最初、警備部隊以外あり得ないとは思ったが、もしかしたらテロリストがどさくさに紛れ込んで病院内に侵入しているかもしれないな

いので、最初に聞いた事に付け足す形でレオハルトに聞いた。

「どちらでもいい、どう足掻いてもMTやノーマルが奴に勝てる訳が無い。」

「ノーマル？何だそれは？」

「詳しい事は後で話す。今は此処から脱出する事を考える。」

「……わかったよ。」

俺は相手に返事をしたら、他の二人より速く俺の機体へ小走りで向かい、コックピットの中に入ってACの機動準備を始めた。

そして俺がACの機動をしているとき、レオハルトとオペレーターがこちらへ向かって歩きながら何か話していた

「聞くのを忘れていたが、君はMTの操縦はできるか？」

「できるけど…それがどうしたの？」

「何でもない、気にするな。」

と、そんな会話が聞こえた。まあ俺にはあまり関係が無いから聞き流したが…

そして逆足MTにはオペレーターが、白い天使のようなAC…ノブリスオブリージュにはレオハルトが搭乗して、各々機体の機動を始めた。

- メインシステムの機動が完了 -
- 修正プログラム、最終フェーズまでチェック完了 -
- システムを通常モードから戦闘モードに移行 -
- 武装の作動チェック終了 -
- ハッチのロック完了 -

暫くすると、真っ黒いモニターにメッセージが一つ一つ表示され、最後にはハッチがパシユンと音を出しながら閉じた。

ハッチが閉じると、さっきまでメッセージしか表示していなかったモニターが、周囲の風景を映しはじめ、それに続いてレーダーやEN残量のゲージ、武装弾数が表示され、戦闘体制が整った。

そしてモニターのシステム系から最後のメッセージが消えると、レ

オハルトから音声通信が入った。

「レイヴン、今から病院を脱出するが、一つ忠告しておこう。」

「忠告？何だ？」

「簡単な事だ、決して出会うACと戦うな。もし出会ったらすぐに逃げる。」

「何故だ？敵は倒した方が良いだろう？」

「君では到底勝てない相手の可能性が高いからだ。」

最後のレオハルトの言葉に俺はちよつとムカついた。

確かに俺は、誰から見ても弱い部類に入ると思う。

ただ、それをはつきり言われるのはなあ…誰でも怒ると思う。

「レイヴン！来たぞ！」

「は？何がだ……」

レオハルトが通信をして、俺が間の抜けた声で返事をしている途中に、突然俺達がさつきまでいた屋上の入り口の部分が、六つある柱のような閃光が空に向かって伸び、入り口を消し飛ばした。

そして、屋上の入り口があった場所にすっぽりと空いた直径15m程の円形の穴から、何か神々しい者が天に昇るようして、『もう1機』のノブリス・オブリージュが現れた。

その瞬間俺は驚愕した。何故ならすぐ隣にいる機体と瓜二つの機体が目の前にいるからだ。

「レイヴン、今からあのノブリスから逃げる。決して戦うなよ、下手をしたら死ぬ。」

まだ啞然としている俺にレオハルトはそう告げた。

「レオハルト…あれは一体何なんだ!？」

「説明は後だと言っただろう。今はOBを起動して逃げる、無事逃げ切れたら話してやる」

そうして俺の、さらなる地獄が始まった。

## 第7話 ある病院にて・後編（後書き）

原作からの出演キャラの台詞構成や、行動がおかしいor間違っている等があったら、感想欄に書いてください。できる範囲で直します。作者はPSPでしかACをした事が無いので…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8919x/>

---

アーマード・コア Another story

2011年12月15日23時49分発行